

大谷大学大学院 自己点検・評価報告書
2017年度

真宗学専攻

仏教学専攻

哲学専攻

社会学専攻

仏教文化専攻

国際文化専攻

教育・心理学専攻

<自己評定> A	<相互評定> S
1. 【2017年度の目標等】	
[目標] 博士後期課程の研究に関する「博士後期課程研究計画（例）」および現状を踏まえた検討	
博士後期課程の研究に関して、2016年度に見直しをした「博士後期課程研究計画（例）」（真宗学専攻）および現状を踏まえて問題や課題の有無等を検討する。	
[達成基準]	
行動計画の遂行をもって達成とする。	
[行動計画]	
<p>① 2016年度に見直しをした「博士後期課程研究計画（例）」および現状を踏まえて、博士後期課程の研究に関する検討会を2017年度前期に開催する。</p> <p>② 夏期休暇中に現状の把握および問題点や課題等を整理する。</p> <p>③ ②を踏まえながら、博士後期課程の研究に関して、関係教員による会議を2017年度後期に開催し、課題や問題の有無および改善策等を検討する。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
「行動計画」は全て達成した。	
①「博士後期課程研究計画（例）」および現状を踏まえて、博士後期課程の研究に関する前期の検討会を2017年8月31日（木）に開催した。	
②①を踏まえて、現状の把握および問題点や課題等を「検討会(2017.8.31)の要旨」として夏期休暇中に整理し、10月にその内容を関係教員間で共有した。	
③後期の検討会を2018年2月6日（火）に開催した。これを踏まえて「検討会（2018.2.6）の要旨」として整理し、2月にその内容を関係教員間で共有した。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
関係教員による検討会を、2016年度は前期に一度であったが、2017年度は前期および後期と二度開催することによって、現状の把握および問題点や課題等をより丁寧に検討することが出来、またその内容を関係教員間で共有できた。	
[改善すべき事項]	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
<ul style="list-style-type: none"> ・「検討会（2017.8.31）の要旨」 ・「検討会（2018.2.6）の要旨」 ・『2016（平成28）年度 真宗学会例会 活動報告』 <p>（なお、『2017（平成29）年度 真宗学会例会 活動報告』は、2018年4月頃に発行される予定である。）</p>	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

博士課程の学生の研究活動について、2回検討会を開き教員間における共通理解を図るとともに、前後期で学生の変化等を点検したことを確認できる。本報告書には記載されていないが、根拠資料「検討会（2018.2.6）の要旨」により、特に『真宗学会例会活動報告』に示される活動を通して、博士課程の学生が研究を深めていることは高く評価できる。今後も指導と学会活動との連動を強化し、学生が研究の視野を拓げていくことを期待する。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標] 修士課程の研究に関する「修士課程研究計画（例）」および現状を踏まえた検討	
① 「修士課程研究計画（例）」や「真宗学特殊研究（論文指導）」および現状を踏まえて、修士課程の研究に関して問題や課題の有無等を検討する。	
[達成基準]	
行動計画の遂行をもって達成とする。	
[行動計画]	
① 「修士課程研究計画（例）」や「真宗学特殊研究（論文指導）」および現状を踏まえて、修士課程の研究に関する検討会を2017年度前期に開催する。	
② 夏期休暇中に現状の把握および問題点や課題等を整理する。	
③ ②を踏まえながら、修士課程の研究に関する関係教員による会議を2017年度後期に開催し、課題や問題の有無および改善策等を検討する。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
「行動計画」は全て達成した。	
① 「修士課程研究計画（例）」や「真宗学特殊研究（論文指導）」および現状を踏まえて、修士課程の研究に関する前期の検討会を2017年8月31日（木）に開催した。	
②①を踏まえて、現状の把握および問題点や課題等を「検討会（2017.8.31）の要旨」として夏期休暇中に整理し、10月にその内容を関係教員間で共有した。	
③後期の検討会を2018年2月6日（火）に開催した。これを踏まえて「検討会（2018.2.6）の要旨」として整理し、2月にその内容を関係教員間で共有した。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
関係教員による検討会を、2016年度は前期に一度であったが、2017年度は前期および後期と二度開催することによって、現状の把握および問題点や課題等をより丁寧に検討することが出来、またその内容を関係教員間で共有できた。	
[改善すべき事項]	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「検討会（2017.8.31）の要旨」 ・ 「検討会（2018.2.6）の要旨」 	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

修士課程の学生の研究活動について、2回検討会を開き教員間における共通理解を図るとともに、前後期で学生の変化等を点検したことは評価できる。本報告書には記載されていないが、根拠資料の「検討会（2018.2.6）の要旨」により、特に修士課程の学生が修士論文の執筆や「中間発表会」により研究を深めていることも確認できる。ただし、同「検討会の要旨」でも触れているように、発表をするのは一部の学生に限られているため、更なる検討を継続されたい。

＜自己評定＞ B	＜相互評定＞ A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
<p>博士後期課程3年間の研究計画（例）の検証</p> <p>2016年度に新たに改訂された「博士後期課程3年間の研究計画（例）」が学生指導に有効に機能しているかを検証する。専攻教員のあいだで意見交換・情報共有を行い、問題点があれば改善策を検討し実施する。また研究計画で有効な点や改善すべき点についてレポートを作成し、継続的に検証が行える体制を確立する。</p>	
[達成基準]	
研究計画で有効な点や改善すべき点についてレポートを作成することをもって達成とする。	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> 2017年12月までに、専攻教員のあいだで研究計画（例）が有効に機能しているかを検証する。 それに基づいて、改善策なども含めたレポートを2018年2月中旬までに作成し、大学院文学研究科長に提出する。 	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>2018年2月に大学院ゼミ担当者のあいだでメール会議を行い、「博士後期課程3年間の研究計画（例）」（以下「研究計画（例）」）のなかで改善すべきことがあるか検討した。その結果、「研究計画（例）」は学生指導を行う上で有効に機能しており、特に改善する点は見いだせないという結論に至った。ただし、現行の「研究計画（例）」で学生指導を行ったのは2017年度が初めてであるため、少なくともあと2年間（つまり現行の「研究計画（例）」に基づいて博士課程を修了する学生が出るまで）、「研究計画（例）」の検証は継続するべきである。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<p>「研究計画（例）」では、博士課程3年間の各年に行うべき事柄が網羅されており、特に改善すべき点は見いだせない。学生指導を行う際に、有効なツールとして活用されている。</p>	
[改善すべき事項]	
<p>行動計画では、2017年12月まで「研究計画（例）」の有効性を検証することとしていたが、それが2018年2月まで行われなかった。2018年度には12月までに検証を完了することとする。</p>	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
「博士後期課程3年間の研究計画（例）」	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

「博士後期課程 3 年間の研究計画（例）」に基づいた院生指導の現状について、各教員間で情報交換をおこない、改善点について検討したことは評価できる。しかし、2017 年度より現行の「研究計画（例）」による指導が行われたとのことであるので、今後は、研究計画の年度をわたるスムーズな連携がなされているか、また博士後期課程 3 年間をトータルにみて改善点や課題等がないかを検証し、内容の充実を図っていくことが望まれる。現状では「特に改善点は見いだせないという結論」に至ったとのことであるが、以上の点から評価は A とした。

<自己評価> B	<相互評価> A
1. 【2017 年度の目標等】	
[目標]	
<p>修士課程 2 年間の研究計画（例）の検証</p> <p>2016 年度に新たに改訂された「修士課程 2 年間の研究計画（例）」が学生指導に有効に機能しているかを検証する。専攻教員のあいだで意見交換・情報共有を行い、問題点があれば改善策を検討し実施する。また研究計画で有効な点や改善すべき点についてレポートを作成し、継続的に検証が行える体制を確立する。</p>	
[達成基準]	
研究計画で有効な点や改善すべき点についてレポートを作成することをもって達成とする。	
[行動計画]	
<p>1. 2017 年 12 月までに、専攻教員のあいだで研究計画（例）が有効に機能しているかを検証する。</p> <p>2. それに基づいて、改善策なども含めたレポートを 2018 年 2 月中旬までに作成し、大学院文学研究科長に提出する。</p>	
2. 【2017 年度の達成状況報告】	
<p>2018 年 2 月に大学院ゼミ担当者のあいだでメール会議を行い、「修士課程 2 年間の研究計画（例）」（以下「研究計画（例）」）のなかで改善すべきことがあるか検討した。その結果、「研究計画（例）」は学生指導を行う上で有効に機能しており、特に改善する点は見いだせないという結論に至った。ただし、現行の「研究計画（例）」で学生指導を行ったのは 2017 年度が初めてであるため、少なくとも 2018 年度まで（つまり「研究計画（例）」に基づいて修士課程を修了する学生が出るまで）、「研究計画（例）」の検証は継続するべきである。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<p>1. 2016 年度に、修士課程の学生のために「研究計画（例）」が新たに作成され、履修要項に掲載されるようになったため、修士課程の 2 年間でいつ何を行うべきかが可視化され、学生指導をより効果的に行うことができるようになった。</p> <p>2. 「研究計画（例）」では、修士課程 2 年間の各年に行うべき事柄が網羅されており、特に改善すべき点は見いだせない。学生指導を行ううえで、有効なツールとして活用されている。</p>	
[改善すべき事項]	
<p>行動計画では、2017 年 12 月まで「研究計画（例）」の有効性を検証することとしていたが、それが 2018 年 2 月まで行われなかった。2018 年度には 12 月までに検証を完了することとする。</p>	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
「修士課程 2 年間の研究計画（例）」	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

「修士課程 2 年間の研究計画（例）」に基づいた院生指導の現状について、各教員間で情報交換をおこない、改善点について検討したことは評価できる。修士課程の「研究計画（例）」は 2017 年度より導入されたとのことだが、年間スケジュールの可視化によって、効果的な院生指導が期待できる。今後は、研究計画が年度をわたるスムーズな連携がなされているか、修士課程 2 年間でトータルにみて改善点や課題等がないかを検証し、内容の充実を図っていくことが望まれる。現状では「特に改善点は見いだせないという結論」に至ったとのことであるが、以上の点から評価は A とした。

<自己評価> S	<相互評価> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
新規科目「仏教学特殊研究（論文指導）」の活用方法について 2015年度より新設された「仏教学特殊研究（論文指導）」が学生の基礎知識の充実や修士論文作成にどのように機能しているかを専攻内で確認し、改善すべき点を洗い出し、より積極的な授業内容となるよう教員間の合意を得る。また「仏教学特殊研究（論文指導）」で有効な点や改善すべき点について報告書を作成し、継続的に検証が行えるための体制作りを行う。	
[達成基準]	
当該授業の現状の点検と改善点を含んだ報告書を2018年2月中旬までに作成することをもって達成とする。	
[行動計画]	
1. 2017年12月までに、専攻教員のあいだで「仏教学特殊研究（論文指導）」が有効に機能しているかを検証する。 2. それに基づいて、改善策なども含めた報告書を2018年2月中旬までに作成し、大学院文学研究科長に提出する。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
2017年12月から2018年1月のあいだ、「仏教学特殊研究（論文指導）」の受講生にアンケートを実施し、その結果を専攻の教員で共有した。アンケートでは14名（100%）の学生から回答を得たが、「仏教学特殊研究（論文指導）」が修士論文作成に「大いに有効」と答えた学生が12名（86%）、「有効」と答えた学生は2名（14%）であった。また改善すべき点を問うところ、3名（21%）が「あまりない」と、10名（71%）が「ない」と答えた。（無回答が1名 [8%] いた。）このアンケート結果を踏まえて、「仏教学特殊研究（論文指導）」の授業は現状通り、今後も運用することが適切であると判断した。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
「仏教学特殊研究（論文指導）」を受けることによって、修士論文作成のために必要な文献読解力や文書作成力が向上している。	
[改善すべき事項]	
アンケートからは学生が「仏教学特殊研究（論文指導）」の授業内容について特に改善を求めている意見は出されなかった。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
「2017 仏教学専攻仏教学特殊研究（論文指導）」に関するアンケート・「2017 仏教学専攻仏教学特殊研究（論文指導）」に関するアンケート 結果報告」	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

「仏教学特殊研究（論文指導）」に対して受講生へのアンケートを実施し、授業に関する院生の意識の把握に努め、またアンケート結果を教員間で共有したことは評価できる。本報告書では「改善すべき事項」として、アンケートから授業内容についての改善を求める意見が出されなかった点が挙げられているが、そのための対応策や改善策については触れられていない。比較的少人数で実施される授業であるので、アンケート等では受講生の要望や意見が自由に出やすくするための配慮や工夫が望まれる。アンケート結果はたいへん良好であるが、以上の点から評価は A とした。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
博士後期課程 3年間の改訂された研究計画（例）に問題がないかどうかを検証し、研究計画（例）の改善を図ること。	
[達成基準]	
行動計画の遂行をもって達成とする。	
[行動計画]	
2016年度に改訂された研究計画（例）を適宜検証し、2017年11月15日をめどに、研究計画を改善する。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
2017年度の段階では、博士後期課程 3年間の改訂された研究計画（例）について、在籍者がすでに最終学年に達している状況との関連で、3年目の研究計画には問題がないことを確認した。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
改訂された研究計画（例）は、3年目の計画に関するかぎり、学位請求論文をまとめるのに役立っていると見られる。	
[改善すべき事項]	
さしあたり改善すべき点はないが、現段階では、最終学年の在籍者との関連から、もっぱら3年目の計画についてしか検証がなされていない。今後さらに、博士後期課程 3年間の全体にわたって、研究計画が問題なく実行できるかどうかを検証する必要がある。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	

<相互評価担当者使用欄>
<所見>
博士課程 3年間の改善された研究計画書（例）を精査し、それが学位請求論文をまとめるうえで有効であるかを検討したことは評価できる。また今後は博士後期課程 3年間の全体にわたって検証を行うことを計画している点も評価できる。以上の点から評価を A とした。

＜自己評定＞ A	＜相互評定＞ A
1. 【2017 年度の目標等】	
[目標]	
2016 年度に新たに作成された修士課程 2 年間の研究計画（例）に問題がないかどうかを検証し、研究計画（例）の改善を図ること。	
[達成基準]	
行動計画の遂行をもって達成とする。	
[行動計画]	
2016 年度に作成された研究計画（例）を適宜検証し、2017 年 11 月 15 日をめどに、研究計画を改善する。	
2. 【2017 年度の達成状況報告】	
2017 年度の段階では、新たに作成された修士課程 2 年間の研究計画（例）については、最終学年の在籍者に関するかぎり、研究計画に問題がないことを確認している。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
新たに作成された研究計画（例）は、2 年目に関するかぎり、修士論文をまとめるのに役立っていると見られる。	
[改善すべき事項]	
さしあたり改善すべき点はないが、今後さらに、修士課程 2 年間の全体にわたって、研究計画が問題なく実行できるかどうかを検証する必要がある。特に、近年しばしば受け入れている、長期履修を希望する社会人学生の研究のあり方を十分に考慮する必要がある。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	

＜相互評価担当者使用欄＞
＜所見＞
2016 年度に新たに作成された修士課程 2 年間の研究計画（例）を精査し、それが修士論文をまとめるうえで有効であるかを検討したことは高く評価できる。また今後は修士課程 2 年間の全体にわたって検証を行うことを計画している点も評価できる。以上の点から評価を A とした。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
新規科目「哲学特殊研究（論文指導）」の効果的運用について検討する。	
[達成基準]	
行動計画の遂行をもって達成とする。	
[行動計画]	
「哲学特殊研究（論文指導）」と共同ゼミとの適切な関係を検討する。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
「哲学特殊研究（論文指導）」を共同ゼミとの関係で有効に機能させる方法を、適宜検討してきた。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
「哲学特殊研究（論文指導）」は、共同ゼミでの研究発表を準備するのに役立っていると見られる。このことはアンケート調査の結果からも裏づけられると思われる。	
[改善すべき事項]	
さしあたり改善すべき点はないが、大学院生の減少に伴って、共同ゼミのあり方が変化し、また今後大きく変化すると予想されるため、それに応じて「哲学特殊研究（論文指導）」のあり方も検討する必要がある。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
2017年（前期）学生による授業評価アンケート	

<相互評価担当者使用欄>
<所見>
新規科目「哲学特殊研究（論文指導）」が共同ゼミでの研究発表を準備するのに役立っているかをアンケート調査を用いて検証した点は高く評価できる。また大学院生の減少に伴って、「哲学特殊研究（論文指導）」のあり方を継続的に検討することを計画している点も評価できる。以上の点から評価をAとした。

＜自己評定＞ A	＜相互評定＞ A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標] 研究指導計画表の点検と改善	
2017年度は博士後期課程入学者がおらず、同課程の研究指導計画表に基づき教育実践をおこない、同表を検証することはできないので、ひとまず目標②と集約し、2018年度以降入学者があれば、別に目標として立てることにする。修士課程には1名が入学予定なので、修士課程計画表を研究指導に適用し、改善点が浮かびあがれば、2018年度計画書に反映させる。	
[達成基準]	
院生が研究計画を作成する上で、あるいは指導教員が研究指導を行う上で、研究指導計画表を活用しえたかどうか？	
[行動計画]	
指導教員は研究指導計画表を理解した上で、入学者に4月段階で説明をおこなう。以降、研究の節目節目で、継続的に計画表を活用した研究指導を実践する。適宜、学生に研究指導計画表が活用できるものであったがヒアリングする。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
2017年度修士課程第1学年1名の入学者があった。上記の行動計画はおおむね実行できた。2016年度目標②で、同課程1年目は修論作成の基盤作りとあることを意識し、学生の問題関心の明確化・テーマ設定・資料収集・資料の読解・考察の間のつねにゆきつ戻りつするものとなった。学生の意向もあり、こぢんまりとまとめるよりは、いったん広く深く考える方向をとった。学生本人がかなり意欲的かつ能力のある人物なので、上記の点では予想以上の進展であった。しかしその分、修論に収斂させる作業のハードルが高くなり、学生本人が自分の研究を評価する基準も上がっているため、本人の満足感・達成感にはつながっていない現状である。ただし、2年目に向けて、調査時期、執筆時期のイメージは共有できており、提出締め切り日から逆算して、調査や論文草稿執筆を計画し実践するかたちをすでにとれているので、悲観する必要はないと考えている。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
限られた期間に計画立てて修論に取り組むという意識づけを教員・学生ともに持てるという点で計画表は効果があったと思う。	
[改善すべき事項]	
計画表の趣旨をどう柔軟に個々の学生の現状に合わせてより効果的な方向で活かすかは、難しい課題であると感じたが、改善すべき事項は特に思い当たらない。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
特に根拠資料は無い。	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

1名の院生に対し、丁寧に学修指導を進めてきたことは評価できる。ただ、個別的な対応について述べられているものの、社会学専攻の院生に対してどのような学修を目指すのかをさらに具体的にしておく必要があったと思われる。よって評価はAとした。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標] 「社会学特殊研究（論文指導）」の活用方法について	
2016年度は該当学生がいなかったが、2017年度は1名該当学生が入る予定なので、2016年度の目標を継続する。すなわち、総合的な指導をおこなう社会学特殊研究（演習）担当者と特に論文作成のスキルや倫理について重点的に指導する社会学特殊研究（論文指導）担当者が、学生の研究状況について情報交換し、状況に応じて柔軟に連動する複数教員指導体制で研究指導をおこなう。この体制が円滑に作動していたか、学生の研究指導に効果的に働いたか、検証する。	
[達成基準]	
<ul style="list-style-type: none"> ・両科目での指導の趣旨が学生に的確に理解され、学生が論文指導を積極的に履修し、学修が進んだかどうか？ ・両科目担当者が継続的に情報交換し、食い違いや過剰負担が生じず、手厚い複眼的指導ができたかどうか？ 	
[行動計画]	
<ul style="list-style-type: none"> ・演習担当者は、論文指導の授業について、学生に説明し、前後期の履修を強く推奨する。 ・両科目担当者間で、テーマの絞り込み、文献資料の収集や精読、アウトラインの作成、原稿の作成と推敲など各作業についての学生の状況について、適宜情報を交換し、それぞれの演習での指導についても情報交換する。指導の穴、方向性の食い違い、学生への過剰負担が生じないように留意する。 ・両科目の連動関係について、学生に適宜ヒアリングし、状況を確認する。 	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<ul style="list-style-type: none"> ・修士第1学年の論文指導履修については、教員間の話し合いの結果、1年後期と2年前期が望ましいということになり、そのように学生には履修指導した。 ・論文指導授業については学生本人からゼミの時間に状況を聞き、バランスなどを配慮した。教員間で断片的に情報交換はできたが、指導内容に関する立ち入った情報交換をする機会を作るには至らなかった。学生へのヒアリングや教員間の断片的情報交換で、立ち入った情報交換を必要とする状況が生じていないと判断したということである。 	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
学生は、複数の教員に自分の研究をみてもらえることに、メリットを感じているようである。学生と指導教員の間で閉じた指導にならず、開いた指導になる効果がある。教員にとっても、他の教員の助言を間接的に学生からきけるので、自分の指導を考えるうえでのヒントも得られる。	
[改善すべき事項]	
<ul style="list-style-type: none"> ・多忙な教員同士で一学生の研究内容について継続的に情報交換するのは、現実的にはなかなか難しいと感じた。節目節目で互いに気に掛けるくらいが持続可能なスタンスだと思った。 	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
特になし。	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

複数の教員によって、きめ細やかな指導を進めている点は評価できる。それが教員相互にも良い影響を与えている点は評価できる。ただ実際面で、情報交換を継続的に行うことが難しいなど、今後に向けて改善すべき点があることを考え、評価はAとした。

<自己評定> B	<相互評定> B
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
○「仏教文化特殊研究（論文指導）」の活用方法について 修士論文が十全に作成しうるため、「仏教文化特殊研究（演習）」などとの関連性を考慮しながら、指導体制を踏まえて「仏教文化特殊研究（論文指導）」の活用方法について検討する。	
[達成基準]	
[行動計画]がすべて滞りなく実施できたこと以て目標の達成とする。	
[行動計画]	
○前期：「仏教文化特殊研究（論文指導）」の現状を把握する。 5月 「仏教文化特殊研究（論文指導）」の現状を共有する。 6月 「仏教文化特殊研究（演習）」などとの関係について整理する。 7月 「仏教文化特殊研究（論文指導）」の問題点を整理する。 ○後期：「仏教文化特殊研究（論文指導）」の活用方法を策定する。 9月 「仏教文化特殊研究（論文指導）」の位置づけを検討する。 10月 「仏教文化特殊研究（論文指導）」の内容を検討する。 11月 「仏教文化特殊研究（論文指導）」の活用方法をまとめる。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
おおむね達成できていると思われる。ただし、担当教員全員が集まって意見交換をしたり問題を検討したりすることは、日程調整の難しさから、ほとんどできなかった。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<ul style="list-style-type: none"> ・「論文指導」によって自己の適性と研究の方法を改めて確認し、修士論文作成に向けて明確な筋道を構築することができた者が多い。 ・自分自身の研究が当該学問分野のなかでどのような位置を占めるのか、どのような意義を持つのかを、より広範な視野で捉えられるようになった者も多い。 	
[改善すべき事項]	
担当教員が集結して問題を洗い出し、その対策を検討する時と場を、もっと設ける必要がある。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

評価すべき点は、「仏教文化特殊研究（論文指導）」における指導によって、多くの学生が、修士論文作成の目標のもとで、自己の研究の方向性を見出したことである。また、自己の研究を、より広い学問的位相のなかに位置づける視野を身につけた学生が多かった点も評価できる。だが、担当教員間のコミュニケーション不足が見られた点は、やや残念であり、2018 年度以降、この点の充実が望まれる。以上から、評価は B とした。

<自己評定> B	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
大学院国際文化専攻の指導方針を明確にするために、大学院生のための学術論文の書き方の手引きを作成する。	
[達成基準]	
2017年度は、現在の学生の在籍状況を考慮し、『博士後期課程の学生のための学術論文の書き方の手引き（仮題）』を作成し、学生に配布することをもって目標を達成したとする。	
[行動計画]	
<p>2016年度の目標に掲げた「修士課程2年間の研究計画（例）」の作成、「博士後期課程3年間の研究計画（例）」の見直し、新設科目「国際文化特殊研究（論文指導）」の活用方法の検討の3件の達成を踏まえ、その目標をより具体的に学生に示すために、学術論文の書き方の手引き書を作成する。2017年度の在学学生は全員博士後期課程の履修生であるので、まず2017年度中に博士後期課程の学生のための学術論文の書き方の手引きを作成し、学生に配布する。</p> <p>学生は、各ゼミの教員による論文指導→合同ゼミでの研究発表→学術誌への論文投稿→博士論文というプロセスで研究を進める。そこで論文の書き方の手引きでは、まず学術誌への論文投稿に至るまでの研究過程と、さらにそれを積み重ねて博士論文を執筆するまでの過程に分けて、研究および論文執筆の手順を明確に理解できるようにする。</p> <p>○前期</p> <p>5月：国際文化専攻の学生が学術論文を書く際に必要となる項目を洗い出す。</p> <p>6月：論文の手引きのアウトラインを作成する。</p> <p>7月～9月：各項目の草稿を執筆する。</p> <p>○後期</p> <p>10月：各教員が相互に加筆訂正を行う。</p> <p>11月：最終稿を作成し、合同ゼミにおいて学生に説明・配布し、学生からの意見を求める。</p> <p>12月：学生からの意見を元に学術論文の書き方の手引きを完成する。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
2017年度、博士後期課程の学生のための「論文の書き方」の手引きを作成し、専攻のオリジナル・サイトで公開した。この点で達成基準はおおよそ達成できたと考えられるが、行動計画のうち、学生に説明し、意見を求めて改訂する作業は行えなかった。これについては、2018年度前半に学生に紹介して、その意見を求め、さらに文献表の書き方など記述が不足している分を増補していきたい。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
博士後期課程の学生のための投稿論文・博士論文の書き方の手順（研究の手順を含む）を、簡潔にまとめることができた。	
[改善すべき事項]	
論文の書き方の手引きは、現在の学生の状況に合わせて作ったつもりであるが、それが学生にどの程	

度理解され実践してもらえるかの検証ができていない。簡潔であるが故に分からないところがあるかも知れず、またなるほどとは思っても、いざ論文を書こうとすると、手引きのようには行かない事柄が出てくる可能性もある。それらを踏まえて随時、検討し更新していく必要がある。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

1. 「論文の書き方―博士後期課程用」。専攻のオリジナル Web サイトで公開している (<http://www3.otani.ac.jp/intcl/how-to-write-articles/>)。

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

2017年度の目標である、「論文の書き方―博士後期課程用」の作成と公開については、執筆にいたるまでのプロセスにも詳細に言及し、充実した内容の手引きとなっており、目標達成とみなすことができる。ただし、達成状況報告にあるように、最終稿に対する学生からのフィードバックがえられていない点等、2018年度以降に継続して取り組むべき課題が残されている。

＜自己評定＞ B	＜相互評定＞ B
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
大学院国際文化専攻の修士課程学生の志願者を増やす。	
[達成基準]	
2018年度国際文化専攻修士課程の進学志願者がいたことをもって目標を達成したとする。	
[行動計画]	
<p>2016年度、2017年度と国際文化専攻の修士課程の志願者は0名であった。このため2018年度の修士課程在籍学生も0名となった。修士課程は、学部での学習を踏まえ、より専門的な知識と教養を幅広く身に付けることを目標としており、社会にとってより有用な人材を提供できるはずである。しかし、現在、学部から国際文化専攻の修士課程に進学を希望する学生はいない状況である。国際文化専攻は、文学部の文学科と国際文化学科の学生の進学先となっている。そこで、これら2学科の学生に、大学院国際文化専攻の教育の意義や魅力を伝えるよう努める。また2学科以外に対しても、国際文化専攻の教員の研究を学生に分かりやすく伝える工夫をする。</p> <p>具体的には</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国際文化専攻の修士課程を修了した学生に取材をして、修士課程の研究や魅力について話してもらう。 2. 文学科・国際文化学科の教員との懇談を行い、国際文化専攻の大学院の指導方針を説明し、協力を依頼する。 3. 国際文化専攻の教員の関連のある学科のゼミの時間において、大学院についての簡単な紹介のプレゼンを行う。 4. 国際文化専攻の教員の研究や授業を紹介するオリジナル・サイト（あるいはブログ）を作成し、毎月更新をして学内外に国際文化専攻の教育・研究を広報する。 <p>実施時期については、年度初めの専攻の会議において計画を立てる。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
2018年度入試において、修士課程への志願者が1名いたので、達成基準を満たしていると言えるが、実際に入学はしなかったため、入学者は修士・博士後期課程ともに0のままである。また専攻のオリジナルWebサイトを作ったものの、その内容を魅力的なものにするまでには至っていない。その他の広報手段の連携も取れていない。これらは2018年度以降の課題となる。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
修士課程の志願者が1名いた。また専攻の情報を発信する場所として、専攻のオリジナルWebサイトを開設することができた。	
[改善すべき事項]	
合格したにもかかわらず、入学しなかった学生がいるので、合格者に対して、入学辞退にならないように、相談に乗るなどのフォローをした方がよかったと思われる。また専攻のオリジナルWebサイトのコンテンツをより魅力的なものにしていく必要がある。このサイト以外にも情報発信の手段を複数	

実施する必要がある。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

1. 専攻のオリジナル Web サイトは、<http://www3.otani.ac.jp/intcl/>である。

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

2018 年度入試への志願が 1 名あったことで、最低限の基準は満たしたと言える。また、内部進学者発掘の取組みやオリジナル Web サイトの公開など、志願者獲得への情報発信の努力も評価できる。今後もこれらの取組みを継続していくことが望まれる。

＜自己評定＞ B	＜相互評定＞ A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
学部生に対して教育・心理学専攻の存在を周知する。	
[達成基準]	
行動計画に示した項目を滞りなく実施し、学部生に教育・心理学専攻について周知できたことをもって達成とする。	
[行動計画]	
<ul style="list-style-type: none"> ・専攻の教育内容などを説明した PR 用紙を作成、教育・心理学演習Ⅲ・Ⅳの時間に配布する。 ・学部生からの質問を受ける時間を設定する。(運営委員を中心に授業担当者のオフィスアワーの時間を利用することなどを PR 用紙に記入) 	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
専攻の教育内容などを説明した PR 用紙を作成し、2017年7月上旬に、教育・心理学演習Ⅲ・Ⅳの授業時間に配布した。その PR 用紙のなかで、大学院進学に関心をもつ学部生に対して、大学院運営委員に相談するように促した。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
大学院入試(春季試験)に、学部生から出願者があった。	
[改善すべき事項]	
さらに効果を上げるために、単に PR 用紙を配布するだけでなく、教育・心理学演習Ⅲ・Ⅳを担当する各教員に、大学院教育の意義について口頭で説明してもらうように依頼する必要がある。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
1.専攻の教育内容などを説明した PR 用紙	

＜相互評価担当者使用欄＞
＜所見＞
<p>本学の大学院に教育・心理学専攻があることを周知するために PR 用紙を作成し、全員に配布できた点で、当初の行動計画および目標は達成できたので、A 評価とした。ただし、PR 用紙の内容は抽象的で、学生の関心を呼ぶには弱いと感じられる。項目 1～3 の専門的な知識や技能の修得は大学院の本来の理念ではあるが、学生にとっては資格や具体的なメリットを強調した方が関心を持ちやすい。PR 用紙の内容をさらに検討して、より効果を上げることが望まれる。</p>